

陽明学に学ぶ『小信を重んじる』生き方

林 田 明 大

陽明学は、今で言う自己啓発なのです

皆さんこんにちは。林田明夫と申します。実を言いますと、テーマは「小信を重んじる生き方」となっていますけれど、その後、ちよつと内容的に修正をしました。また、本日は若い方の姿も多く見受けられますので、更に軌道修正を頭の中でしているところです。ですから、ちよつとまとまりがつかない部分があるかと思いますが、その辺はご勘弁下さい。

私の子供がまだ幼稚園と小学二年生でして、その関係で気になつてしまふのですが、幼児誘拐や幼児虐待殺人事件とかが、とても今の日本に増えているように思います。

例えば、最近、奈良で七歳の女の子が殺されました。犯人は、普通の神経ではない、非常に猟奇的な殺人犯なのです。こういう事件が相次ぐと共に、大学生のレベルで、大学名は言いませんが、

相当破廉恥な事件が相次いでいるということです。

やはり、私も子供を持つ親として、大人として、何とか日本をもうちよつと住みよい日本にするために頑張らないといけない、そういう思いが実はありまして、そこから今日の話の内容に決まつてしまつたのです。

お手元のレジュメにありますが、改題「日本陽明学派に学ぶボジティブ・シンキング」、そういう内容になります。昔の人が書いた記録をもとにお話しさせて頂きますので、言い回しが少し難しいかもしれませんが、ただ内容的には、本当に人生に役立つ、自己啓発の話になります。

ここに『日本陽明学派の研究』という大変分厚い専門書があります。これは、木村光徳さんとおっしゃる山陽女子短期大学の学長だった方ですけど、もうお亡くなりになりましたが、この先生のライフワークですね。サブタイトルは「藤樹学派の思想とその資料」となっています。

私が一九九四年にデビュー作の『真説「陽明学」入門』という本を書きます時に、中江藤樹の弟子や孫弟子たちのことは、この本にあたらないと出て来ないものですから、一〇年前にこの本を買って読んだのです。これは、前半と後半とに分かれます。前半部が木村先生の論文で、後半部が資料、要するに、江戸時代の藤樹学派の人達が残した手紙とか師弟間の問答の記録の類ですね。ですから、一〇年前には、正直言いますと、この本の価値が分からなかったのです。当時は、単にその歴史的事実が知りたかったのです。

陽明学は、今で言う和自己啓発なのですが、江戸時代の日本人達が当時、一所懸命学んだ陽明学をこの私も少しは学ぶと、何かしら良いヒントと言いますか、気づきをもたらるのではないかと思います。この一〇年の間に何度か読んできました。ですから、あちこちにいっぱい書き込みと線が引いてあるのです。

どういふことかと言いますと、今日、日本陽明学派の話を勿論する訳ですけども、この中に出てくるある箇所が、まるで自分のことのようなですね。それは、江戸時代中期の二見直義ふたみちよしよという人の述懐と言いますか、独り言みたいな話なのですけれども、道を求めるあまりに、相当苦しんでいる。苦しんだ挙句に悟りを開くわけですが、そのプロセスが詳しく語られているのです。

会津で約二〇〇年、陽明学の勉強会が続けられた

中江藤樹のお弟子さん達の中に淵岡山ふちこうざん（一六一七〜一八六）という人がいます。淵岡山は、熊澤蕃山くまさわばんざんと並ぶ高弟です。歴史を勉強してもなかなか淵岡山の話は出てきません。熊澤蕃山は結構出てきます。けれども、この淵岡山は、蕃山同様とんでもない影響力を当時は勿論、その後の日本に与えたのです。

この淵岡山のお弟子さん達が、会津（福島県西部）で約二〇〇年、幕末まで、陽明学の勉強会を続けるのです。それが大変な勢力を持つのです。あちこちに勉強会の会場が増えていく。ある種の宗教活動みたいなものです。中江藤樹を尊敬する人達が、たくさん増えてきて、一所懸命勉強会をして、自己啓発に役立てていったのです。その集まりが、会津では清座と言われてまして、武士も多少集まりますけれども、ほとんどは、庶民の勉強の場です。「人目を忍夜陰しのびやいんに会集致し」とありますが、農民とか町人、庶民が夜、庄屋さんの家などに集まって、先生を囲んで、そこで勉強する訳です。

その時に今日、ここに展示して頂いた掛軸を床の間にかけて勉強会を開くのです。勉強会は、たくさんあった訳ですから、三幅一對の掛軸はいっぱいあったはずですが、今現存するのは、これだけになりました。江戸時代当時の本物です。会津陽明学の研究家・伊藤豊松先生とよまつからお借りしたものです。真中が孔子像ですね。

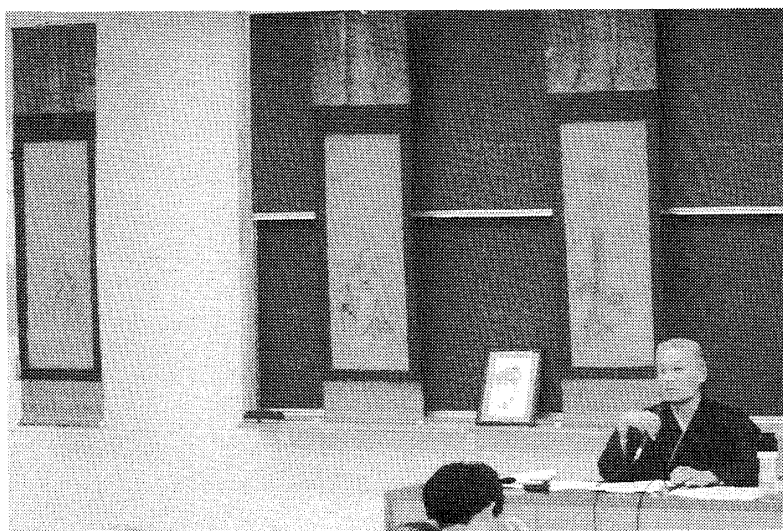
こちらは、竹に月が描いてある。あちらは、梅に日輪（太陽）ですね。

箱書きには狩野探玄筆と記してあります。

勉強したと言っても、難しい話ではないのです。藤樹学を学ぶ者達は、テキストとして、『大学』『中庸』『孝経』を重要視し、その

ことについての話もしておりますが、おおよそ今で言うところのセミナー（講習討論）であり、ある時は人生相談もなされていきます。その人生相談、カウンセリングしてくれる人が、藤樹の教えや陽明学を学びかつ体得した先生な訳です。

江戸時代には、そういう勉強会が、会津だけではなくて日本各地に存在しまして、当時のデータが、今ほとんど失われつつあります。この本の中に辛うじて残っている訳ですが、あいにく



く、一般の人が読めるような状態ではないのです。非常にもったいないので、今日ここで、少し内容をご紹介したいと思った次第です。

熊澤蕃山と淵岡山は、当時の日本のスーパースター

中江藤樹（一六〇八〜四八）という人は、江戸初期の儒学者です。私も子供の頃から知っていますけれども、好きではなかった。どうしてかと言いますと、近江聖人というあだ名が付いていますから、何となく堅苦しい感じがして、抵抗がありましたね。一〇代後半、二〇代の頃には、修身だとか道徳だとかにもの凄く抵抗があつて、西洋哲学や西洋文学や芸術、心理学、錬金術とかの世界に没頭していたのですが、いろいろ取り組んで来て、分かてきたのは、やはり“浅い”“観念的”という印象が一番だったのです。今でも例えば、時々、心理学の本とか、紐解いてみたりしますけれど、やはり“浅い”“という思いは、未だに拭いきれません。その代わり、東洋思想をやればやる程、一〇年経ってやっと分かるというそういう時期が来るくらいに、本当に深いです。とはいえ、西洋にも凄い人はいます。人智学の創始者・ルドルフ・シュタイナー、ネオ・ライヒといわれる心理学の一派の創始者・ヴィルヘルム・ライヒなどは別格ですね。

中江藤樹については、知れば知る程、やはり巨人だなという思

いがします。この方は、四〇歳という若さで亡くなっていますけれども、三五歳位から陽明学に本格的に取り組み始めて、三七歳頃に悟りを開いた方ですね。

中江藤樹の二大弟子の熊澤蕃山と淵岡山は、当時の日本のスーパースターなのです。とにかく当時の日本の知識人が、大名とかお公家さんとかの日本のエリート層が、熊澤蕃山（一六一九〜九一）を崇め奉ったのです。それは、熊澤蕃山が学者として凄いのではなくて、テクノクラートの実学者として、更に人間として凄い訳です。例えば農業とか林業、あるいは河川の氾濫をどう食い止めるべきか、治山治水は当時の一番大事な学問ですけど、熊澤蕃山は、具体的にそれらについてのノウハウを持っているんです。相談を受けると、キチツとそれを指図して、やってのける。単なる学者というよりも、実務の方にも能力を発揮した人です。また、熊澤蕃山の場合、京都のお公家さんや大名といったエリート層が、熊澤蕃山のお弟子さんになっていきます。

淵岡山の場合は、武士は勿論、一般庶民が対象です。延宝二（一六七四）年、京都に学館、つまり学校を建て藤樹を祭る祀堂（しどう）を設けたのです。当時は、藤樹先師学術などという言い方をしていますね、中江藤樹の教えということです。

藤樹学と陽明学は、区別できないことは無いのですけれども、藤樹学をやっている人は、陽明学も勉強するのです。じゃあ、陽明学をやっている人は、藤樹学を勉強するかというと、そうとは

限りませんでした。

会津の町医者二人、淵岡山の学館に四年間留学

淵岡山が、一般庶民を対象にしたことによって、裾野がどんどん広がって、日本には当時、二六〇前後の藩があつたと思います。なんと淵岡山が存命中に、二四の藩に藤樹の教えと陽明学が伝えられたのです。

淵岡山は、その晩年には、時の將軍綱吉の前で講義をするという御前講義が企画されます。御前講義が決まって、淵岡山がお弟子さん達と一緒に江戸に出てきて、宿を取って、綱吉とその臣下になる大名の前で、藤樹の教えを披露する数日前になって、殿中で刃傷沙汰（にんじょう）が起きます。貞享元（一六八四）年八月二八日、熊澤蕃山の弟子で陽明学びいきの大老・堀田正俊が、親戚の若年寄・稲葉正休に刺殺されたのです。で、急遽中止になってしまふ。中止になつても、流石に淵岡山、ガツカリはしなかったらしいですが、泰然自若として、京都に戻ります。そして、二年後に、七〇歳で亡くなってしまふ。

將軍の耳まで、淵岡山の活躍振りは届いていた。それぐらいですから、一般庶民レベルでも、藤樹学が広まっていました。江戸中期の町奉行大岡越前守忠相も藤樹学をかなり推奨していました。これは、非常に良い学問であると。

熊本にも淵岡山のお弟子さんが、やはり陽明学を広めていきます。会津と同じで、途中で陽明学禁止令が出ます。これには、色んな複雑な事情がからみ合っています。一旦、その禁止令によって火が消えるかに見えますけれども、禁止令が解かれ、復活して、さらにまた、後継者が生まれていく。中江藤樹のお弟子さん達は、熊本、会津、伊勢、美作（作州）^{みまさか}、これは岡山県の東北部ですね、江戸、京都、まだ他にも、宮崎とか、いろいろありますけれども、大体そういう所が、非常に一所懸命取り組んだところであります。特にその中でも、一番盛んだったのが会津です。その会津陽明学の人達が残した記録が私にとっても、今、大変役に立っています。

少し実践的な話にいきたいと思います。この会津陽明学の開祖は、大河原養伯^{おおがわ しょうはく}、荒井真庵^{あらい しんあん}の二人です。この二人、会津若松の町医者なのです。当時は、保科正之の子孫の保科氏が藩主をしておりまして、この保科氏は、御三家に次ぐレベルの、徳川一門なのです。保科正之が会津に転封^{てんぽう}になる前には、蒲生氏^{がもう}が次いで加藤氏がそこを領有していました。国替^{くにがえ}となり、保科氏が会津に移って来た為に、旧藩主の家来達はどうするかというと、どこか他領へ行くか、地元で農民に帰るという選択を迫られて、大体農民に帰る。といつても、上級農民の庄屋レベルあるいは町医者になる。延宝年間（一六七三〜一六八〇）、町医者的大河原養伯、荒井真庵の二人が若松の諏訪神社に詣で、更に伊勢まで行って、神宮に祈願し、「実学の良師を求めさせたまえ」と、お願いして、旅

に出る。多分、どこかで噂を聞いたのでしよう、京都に淵岡山という凄い先生がいるということで、大河原養伯、荒井真庵は、淵岡山の塾に四年間留学します。会津若松に帰った二人は、矢部総四郎という人に、お前も勉強せいということで、京都の淵岡山の学館に送りこむんです。矢部総四郎は、勉強をして帰国し、それを仲間へ伝え、そういうことを繰り返していく内に、藤樹学の仲間が増えていったのです。それは、単なる観念論ではなくて、人生に、生活に非常に役立つということが大きかったからだと思います。

良い習慣がいくつも身についた人は、楽

今日、陽明学の話初めて聞く人もいらつしやると思いますので、おさらいをしておきたいと思います。「知行合一^{ちぎょうごいつ}」とか致良知^{ちりよう}という言葉が陽明学でとても有名なのですが、非常に誤解もありまして、例えば、「知行合一」は、言行一致のことであるというふうな理解が一般には浸透してしまっております。言っていることと、やっていることを一致させるのが、知行合一であると。これは、私に言わせると、全然違います。

私の経験から言いますと、こういうことがありました。電車に乗ってしまして、たまたま小田急線でしたから、コーヒーを注文して、本を読み、コーヒーを飲みながら、おばさんのグループの

雑談に耳を傾けながら、電車に乗っていました。ふっと気がついたことがあります。このおばさんグループも、お菓子を食べて、飲み物を飲んだりして、私もそうです、コーヒーを飲みながら、本を読む訳です。何を気付いたかと言ったら、普通は、思いが先で、次にアクション、行動だというふうに理解するんです。今から箱根に行くぞと決めたので、思いが先にある、じゃあ、箱根へ行こうか、次に行動だ、と。あるいは、親孝行をするにあたっては、先ず『孝経』を読んで、親孝行のやり方についての正しい知識を修得し、次に実践だ、行動だと……。朱子が言うように、「先知後行」、まず、先に知識が、あるいは思いがあつて、後に行動があると。

朱子是这样いうふうに教えた訳ですけども、王陽明は、「違う。知行合一並進である、知と行は元々一つであり、かつ並んで進むのだ、前後に分かれるものではない」と。でも生活の中では、どっちかというと、「あ、バナナがあるぞ」という認識や「ああ、お腹空いた」という思いが先にあって、じゃあ、食べようかと、食べる訳ですから、先に思いと知識がある。

しかし、電車の中で僕が思ったのは、僕が飲みたいと思ったからコーヒーを注文するし、飲みたいと思っているから、口に運ぶ訳です。本を読みながらですよ、「あつ飲みたいな」と思つて、一回本を置いて、コーヒーに手を伸ばして、飲んでいる訳じゃない。飲みたいなと思うと同時にもう飲んでいるのです。これが、

知行合一ということなのです。思いが先にあって、それから後で行動というような分裂した状態は、まだまだと、一体の境地を言いたいのですね。当然、思わなかったら、コーヒーに手は伸びませんから、思いはあるのです。ただ思つた瞬間に飲んでいてだけです。あるいは、思いが、意識に上がる前に、飲んでいるのですね。思いと行動が一つになっている状態、思いと行動に分裂がない状態です。聖人賢者と言われる人達の境地なのです。あるいは我々凡夫にとつての理想の境地、理想としなければならぬ境地なのです。

それが、実生活でどういうふうに関わっていくかと言うと、知と行が別々だと言うから、行動に表わさなければ心の中で何を思おうと勝手となり、心は正されることなく、それどころかますます私欲がその勢力を増すことになるのです。僕らは、どうしても聖人君子ではないですから、あるいは、本当の善人ではありませんから、ゴミが落ちていても、「あつ、どうしようか」と思いますが、拾った方が良いのは分かっているのです。そこで、ワンクッション置いて、「どうしようかな」と、考え過ぎるといいですか、迷つて、ヨイショという思いで、拾う人は拾うのです。

でも、私欲の無い本当の善人は違います。本当の善人は、さっきのコーヒーの時と同じで、パツと見た瞬間にもう拾っているのです。思うと同時にアクションが起きるのです。じゃあ、その違いは、何かと言うと、我（私欲）が強い、強くないかです。俺

が俺がと私の強い人は当然、まず自分の目先の利益を最優先します。ですが、その時に最優先したものが、本当に自分の利益になるかは、別ですよ。勝手に「こうした方が俺の利益になる」と思って行動しただけの話です。俺が俺がという思いが強い人は、「ゴミを拾っても一円の得にもならないから、やめよう」というだけの話ですね。誰かが拾うだろうと。

でも、汚れている所を拭いてあげたら、誰かが困らないとか、あるいは、喜んでくれるとか、気分がいいとか、いろんなことがある筈なんですね。意識的に、つまり作為で掃除したり、ゴミを拾ったりする人も勿論良い人ではあるのですが、本当は、良いと思ったことは、即、体が動いてしまふ、そういう境地になれたら、一番良いのです。そうなれないのは、私欲が邪魔をするのです。自分中心のものの見方、考え方が邪魔をするから、それが出来ないのです。

そうすると、どうすれば良いのかという時に、その教えが陽明学であったり、仏教であったり、神道であったり、あるいは、キリスト教やイスラム教であったりするのでね。じゃあ、良いことをしようと思わないでも、やることなすこと全て良いという、そこまでのいくのは、人間、難しいのだと思います。そこまで行かなくても、挨拶をする、履物を揃える、歯を磨く、トイレを使ったら手を洗う、整理整頓をする、料理する、掃除する、知人友人との会食の時に取り箸を使う、嘘をつかない、などといった良い

習慣がいくつも身に付いた人は、楽なですよ。掃除をする習慣が身に付いていない人は、自分の部屋の掃除すら苦ですから、掃除した方が良いとは、頭で分かっているけど、やはり身に付いていないから、体が動かないのです。しなくちゃと思って、億劫なのです。でも自転車車の運転と同じで、最初はしどろもどろ、七転八倒、転んだりして辛い思いをしますけれど、身に付けば、苦でも何でもなくなります。

試練や面倒な仕事は、工夫と努力を要求してくる

通常、どうしても、苦とか楽というふうに分けて考えてしまいます。自分にとっては、苦であっても、Aさんにとっては、苦じゃないかもしれません。例えば、車の運転、僕は出来ないから、苦なですね。でも、Aさんにとっては、苦ではないでしょうね。そういうことたくさんあります。でも、人間、どうしても自分中心に生きていますから、今日のこの仕事はしたくないとか、この仕事だつたとしてもいいとか、毎日、自分の私欲で、俺が俺がで生きている訳です。その選択基準は、何なのか、ということなんです。私欲を選択の基準にして、本当に幸せな人生を送れますか、ということなんです。私欲が邪魔をしている為に、日々の選択が間違っているかもしれない。

例えば、この男の人が持っている、そのブランド品に目が引か

れて、こっちの男よりもそっちの男の人を選んでしまうかもしれない。相手の中身を見ないで、そういう選択を繰り返していませんか、ということです。仕事でも、この仕事やりなさいと言われるても、いや、私はこの仕事の方が良いとか、この仕事はやりたくないとか、どこかで判断する訳です。やっている振りして、手を抜いてしまおうとか、こっちの仕事はそれなりにやるとか、です。もし、私が仕事を選び好みしたり、人間関係を好み好みて、楽な仕事ばかり、楽な人とはばかり付き合っていたら、私の成長は、全くそこでストップします。要は、剣道の練習もそうですが、自分と同じレベルか自分より下の人と毎日練習するのと同じことです。ああ、今日も練習、楽で良かった。でも、全く進歩はありません。自分より強い人に立ち向かって行く時、初めて、自分の問題点に気付かされるのです。試練や、面倒な仕事は、工夫と努力を要求してきます。楽をすることで、その工夫と努力をするチャンス逃してしまっているのです。工夫と努力をするからこそ、今まで出来なかったことが出来るようになるし、自信もつくし、心も鍛えられるのです。自分にとってちよつと強い相手、ちよつと無理な仕事、つまり苦から逃げまわり、楽ばかりを追い求める人生を送っていたら、その人は、やはり何の成長もない。

今話したような話を当時の江戸時代の集まりでもやる訳です。今の話は、僕なりに追求して気付いた部分を話しているのです。

心の内と外は、元々一つ

私の友人に俳優さんがいまして、この人は、仮にM氏とします、私の昔の稽古仲間です。私は、別に役者になりたかったからではなく、表現力を身につけたくてゼン・ヒロノ・アクティング・ゼミナールという俳優養成所に一時期通いました。二〇代の私は、人前に出るのが苦手だったのです。M氏は、一時期、心身症になつてしまったことがあつたそうです。今現在は、日本で俳優の仕事をしているのですが、M氏が今あるのは、ヴィジョン心理学のおかげだ、というのです。というのは、M氏は自分の心身症を治すために先生を探したそうですが、ハワイ在住のチャック・スベザーノというヴィジョン心理学の創始者に出会って、数年間師事、やがて自分の生き方も大きく変わり、心の病氣もクリアー出来た時には、逆にカウンセリングの出来る心理トレーナーという立場になつていたそうです。

ヴィジョン心理学では、ハイアー・セルフ、大いなる自己という言い方をしますが、これは、陽明学で言う、良知のことです。このヴィジョン心理学は、日本陽明学、藤樹学によく似ているんです。例えば、ヴィジョン心理学では、「内側の世界と外側の世界は、複雑に絡み合っていて、外の世界は、内側の世界の反映だ」というのです。内側の世界と外側の世界については、陽明学では心即理と、心の内と外は、そのまま繋がっており、別々ではなく

て、元々一つだと説いています。

ヴィジョン心理学でも、「あなたのマインド、心を変えることで、世界を変えることが出来る」と説いています。ヴィジョン心理学は、過去何十年も世界に通用している心理学ですし、非常に実践的な心理学で、「私が変われば周りが変わる」と説いているのです。でも、往々として、私たちは、相手を変えようとしています。その相手というのは、自分のパートナーだったり、友達だったり、仕事仲間だったりしますが、自分を変えることも難しいのだから、相手を変えることは、もつと難しいのです。まず、自分が変われば、必ず周りの人間も、自分に対して、見方を変えるのです。

例えば、髪型を変えただけでも、「最近どうしたの、髪型変わったね」と反応します。生き方とか価値観とか、考え方が変わったら、それは、もう周りは、びっくりします。周りの人間も、影響されて、良くも悪くも変わっていく訳です。そのためにまず、自分が変わらなければ、幸せにはなれないのです。

自然界に四季があるように人生にも必ず、四季があります。春、夏だから、まだいいやなどと思つていても、やがて必ず秋とか冬の時代がくるわけです。借金ができたとか、家が燃えてしまったとか、病気になるとか、そういう冬の時代が来ても、びくともしないような心の強さを養つていかないと駄目なんです。そうした心の強さを養う教えが、陽明学なのです。

「良知に致る」ための工夫と努力は、

身体を通してなされるべきである

私が共感しましたのは、淵岡山と淵岡山の片腕になる木村難波きむらなんば、そしてその弟子筋にあたる二見直養ふたみちよくようという人々の教えです。

二見直養は、代々伊勢の神官をやっている家の出で、お父さんが江戸に出て商人になり繁盛しますが、明暦の大火という大火事で全財産をなくして、大変苦勞するのです。一時期神職に就いたりしながらも何とか立て直して、お父さんの商売を継ぎながら、淵岡山の門人の田中全立ぜんりゅうに師事し藤樹学の勉強をして、悟りを開いたという人です。

この三人の考え方に私は、随分と影響されております。

淵岡山は、みようが瞑加は無心に集まる。私知にかぎる時は、冥加なし」と教えています。仏教にも同じような教えがあります。冥加とは、神の御加護、恩寵ですね。神の御加護は、無心に集まります。「私知にかぎる時は、冥加なし」というのは、私心には、神の御加護はないということです。

ここで淵岡山の教えについて、ザツとですが、お話しておきたいと思います。

困勉こんべんの工夫、自己修養や学習も大事だと、もう一方では、良知りようちを信じる努力をしなさいというのが、淵岡山の教えです。これが、実は、非常に画期的なのです。また、「良知を信じろ、意念いねんを信

じるな」「人は良知を持つて生まれた身であり、人は良知から生まれた存在である」「良知は人間の認識を超えた存在である」「人間業（わざ）（作為）を働かせることによって良知に致るのではない」などとも説いています。

ここで「致良知」について少し触れておきたいと思います。

陽明学と藤樹学の違いについては、ほんのちよつと触れましたが、実は、決定的に違う点があつて、それは「致良知」の詠み方なのです。王陽明は、「良知を致す」と読み、藤樹は、「良知に致る」と読みました。藤樹の弟子達もしかりです。

王陽明の場合は、「良知を発揮する」といった意味合いになりますが、藤樹の場合は、「神の分け御霊であるところの良知の境地に到達する」といった感じの、どちらかといえば宗教的なニュアンスに近いものとなります。

「良知に致る」というのは、言い換えれば、「明德（めいとく）（心の本体）を明らかにする」ということであり、仏教で言ういわゆる悟るということなのですが、そのためには、どうすればいいのかということについて、淵岡山はこう述べています。

「心が賤（いや）しければ、形に顕（あらわ）れて賤しく、形賤しければ、心は賤しいものである。つまり、私達の（良知に致る）ための工夫と努力は、身体を通してなされるべきで、いわゆる容貌辞氣（じき）（顔かたちと言葉遣い）、即ち中江藤樹先生が強調したところの五事（ごじ）（『書経』、礼節上の五つの大事なこと、貌・言・視・聴・思の五事を

通してなされるべきなのである。

良知を基にして、五事を調えさえすれば、やがて本体良知に復帰できるはずなのだが、肉体を持つ以上、人には万欲や意念があるためにそれが難しい。意念とは、月にかかる雲のようなもので、本心の偏（かたよ）りを言うのだが、この意念の偏りを除く事がもっとも大事なのである」

そして、この意念の偏りを取り除く工夫こそが、岡山ならではの独特のものなのです。「意念と知るものは良知なり」、つまり、心の中に意念、私欲が起きたことを知らせてくれるのは、良知なのである、と淵岡山は言います。また、「一切の心癖は、意念を信ずるより起これり。良知を信ぜば諸欲なんぞ吾が心を動かさんや」と、一切の万欲は心癖から起きるのであり、この心癖というのは、意念を信じるから起きてくるのであるから、心の本体である良知の方を信じるようにするならば、心が欲に動かされることはなくなるであろう、と。

で、万欲の中に生活していても、良知の持つている善悪、本物偽物を見分ける能力というのは無くなってしまふことはないのだから、良知を意念の偏りをなおすための中墨（なかすみ）、つまりものさしとして利用しなさいと説いているのです。

中墨についてですが、昔、大工が曲がった材木を使うときに、墨縄という道具を使って材木を真っ直ぐにしたわけですが、中墨とはその墨縄で墨付けすることを言います。

原始仏典の一つで東方のバイブルと讃えられる『法句經』に、

「智慧ある者は、權衡（はかり）を手にするなり」とありますが、要は、心にもものさしを持っていつているわけで、同じことです。

一方で、淵岡山は、「日新（日に新た）」という言葉強調しています。日常生活が、習慣や惰性に陥り、日々の生活が新鮮さを失うことをとても警戒したのです。たとえ毎回、ある勉強会に参加していたとしても、マンネリズムに陥るということは、参加するという努力はしていても、工夫をしなくなることにつながるのです。日々の工夫のないところに成長はありません。

何であれ、学習、自己修養が大切なことは分かりますが、淵岡山が一方で強調した、良知を信じろ、という教えには、私は随分と触発されました。

木村難波の高弟・植木、松本二子の「当下の良知」説

二見直養の話に戻しますが、二見直養という人は、藤樹学を学ぶ過程で大変に悩み苦しんだ末に、開悟します。その悩み苦しみが、私にとつて、とても人事とは思えなかったのです。

中江藤樹は勿論、藤樹学を学ぶ人達というのは、求道者なのですね。如何に昨日よりも明日、明日よりもあさつての自分を質的にレベルアップさせることが出来るか、人間として徳のある人間になるか、という工夫と努力を日々怠らない人達なのです。

求道者にはつき物の悩みといってもいいかもしれませんが、会社であれ、何処であれ、指導的立場にある人で、二見直養と似たような経験をしている人は多いのではないのでしょうか。どんな悩み苦しみぶりだったのか、木村光徳先生の『日本陽明学派の研究』に次のように書いてあります。

「二見子は植木、松本二子のように、底なしに素直になれない性格でもあったようだし、いまひとつ二見子は道義感覚の鋭い人であった。江戸に定住する前、一時期、伊勢神宮の神官をしたこともあった人である。ともすれば日常の人倫性につまづくこともあった。その人倫性につまづくことも気になった。植木、松本二子は、日常のつまづきが尊信の媒介となり、ますます良知への信を深めたが、二見子の場合はそうは簡単にゆかなかった」二見子とありますが、子は先生を意味していますので、二見先生ということです。

植木、松本二子について触れておきます。植木、松本二子というのは、植木是水、松本以休両先生ということですが、この二人は、淵岡山の第一の高弟といわれた木村難波の高弟なのです。

木村難波は大阪の人で、師の淵岡山と共に、日本各地に藤樹学の喧伝に努め、やがて「良知を戴祈る」説を唱えました。

木村難波のその高名ぶりを伝える言葉が残っています。

「世に云う、良知の学を、藤夫子唱え、岡山子述べ、難波翁繼ぐ」（『会津外藤樹学道統譜』）と。つまり良知の学を藤樹が唱え、

淵岡山が述べ伝え、木村難波がその後を継いだというのです。

その木村難波の高弟の植木是水という人は、大変興味深い人物です。

作州（岡山県）の商家に生まれましたが、大変に貧しかったために、読み書きを学ぶ機会もないまま、「書を読まず、文字を作らず」とあり、全くの文盲だったそうですが、「天質聡明にして、藤門の学に入り、終に天理の真を見る」と、つまり木村難波に師事して藤樹学を学び、ついに開悟したというのです。勿論、この植木是水も藤樹学の指導者の一人となり、門人の指導に努めているのです。

植木是水について、当時こう評した人がいました。

「老翁を外からみれば、とても困窮しているに違いないのだが、老翁のその心はまるで長者のようにとっても満ち足りて見えた」

藤樹の曾孫弟子ですら、このレベルだったのですから、藤樹の凄さがある程度は、お分かり頂けるかと思います。

松本以休も植木と同じく作州の出で、美作の森美濃守の家臣でしたが、致仕し浪人となり、木村難波に数年師事、難波の最も忠実な後継者として、門人の育成に尽力した、とあります。

植木、松本の二人は、「当下の良知」説というのを唱えたのです。当下というのは、俗語で、「ただいま、目下、そのとき」と言った意味があります。神、あるいは天の分け御霊のことを良知と呼んでいるのですが、そういう神的な、神々しい境地、混じり

物なきうぶな心で満たされている心境を「当下の位」といい、「当下の良知」を簡単に言い換えれば、良知が働いている状態、「私欲のない心境」というふうに理解していいかと思います。

二見直養の「知らず方の良知」説

話を二見直養のことに戻します。

どういうことかという、松本以休、植木是水二子の教えが、極論めいた言い方になりますが、「自分の心の中の良知を信じるだけでいいんだ」というのです。

安藤という人に「先生だって、人間だから、人欲もあるだろうし、平静でない時だってあるだろう」と質問されて、植木是水は、「しかし、そうしたものに目もくれず、ひたすらに、（知るものにしたがう（良知を信じる）、そして欲ぶのみです」と。

この安藤という人は、更に迫り討ちをかけてこう質問するんですね。「先生だって、いつも飲んでるわけにはいかないだろう。心騒ぐこともあるだろう」と。植木是水先生は、「はい、そのとおりでございます。立ち騒ぐ心の奥に、まだ良知が私を見守ってくれております」と。

つまり、植木是水が言いたいことは、こうなんです。事に臨んで失敗してしまった時などに、「不調法だな、お前は」と、不調法な自分に眼をつけるのではなく、不調法だということを気付

かせてくれている、心の本体であるところの良知の方に眼をつけるのだと。

で、「自分には良知が働いているな」と思った瞬間に、良知を信じていることが出来て、胸がすつとするというのですね。

あるいは、自分が今イライラしていることを知った時、そのイライラを自力（作為）で取り除こうと努力する必要はない。イライラしていることを知った時というのは、その瞬間に良知が働いて「お前は今イライラしているぞ」と気付かせてくれているのだから、その良知の方に目をつけて、良知を信じればいいのだ、そうすれば、自然とイライラはおさまるのだ、と教えているのです。

この教えなどは、まさしくポジティブ・シンキングだと思えます。

植木、松本の二子は、こうして日常生活でのつまづきを『良知を戴き祈る』、つまり尊信するきつかけとすることで、ますます良知への信頼を深めたというのです。

ですが、二見直養は、その方法では駄目だった。「底なしに素直になれない性格であり」、とありますが、知識人ということ、考え過ぎるタイプで、それほど単純ではなかったのです。

木村先生の『日本陽明学派の研究』第五編江戸学派にある二見直養の術懐の続きです。「二見子の場合、そうは簡単にはゆかなかった。知識人である上に、当下とうかの良知説によって、鋭く研ぎ澄まされた眼は、自己に沈潜することよりも、他人を批判する眼

と化した。とかく冷たく他人の是非にこだわっている自分に驚きを感じる事が多くなった。良知を尊信し、当下の良知を信頼する自分は、他者も同じく良知を尊信し当下の良知を信頼する存在ゆえ、他者も同行の士としてありがたく他者を戴かれ、尊敬し尊重されるはずである。

ところが現実はそのならない二見子であった。自己の標準に副そわない他者を冷たく裁いているのである。自己が絶対者で他者は自分によって裁かれて罪人と化しているのである。こういう転落する自分を二見子は発見するのである」

藤樹学の指導者である二見直養としては、自己修養に頑張れば頑張るほど、日々の気づきが深まれば深まるほど、同じく藤樹学を学ぶ同志であるにもかかわらず、自分に甘い人やルーズな人を許せなくなつたのです。指導者として、彼らを厳しく批判もしたでしょうが、厳しくすればするほど、彼らから疎まれ、嫌われていったものと思われます。

ですが、こうしたことは、現代社会でも、家庭や会社やサークル活動の中でもよくある話なんです。

誠実に仕事をすればするほど、要領のいい人のことが見えてきますし、気にもなります。「おれはこれだけ頑張ってるのに、それなのに、何なんだお前達は」と、ついつい口にも出してみたくなるものなのです。

二見直養にも、「自己に厳しく、他人に寛容に」ということは、

頭では分かっているのですが、他人を許せなくなる自分との葛藤に苦しんだのです。ですが、その甲斐あって、大きな気づき、悟りを得るのです。まさしく、ブツダ（釈尊）言うところの「苦は聖なり」です。

そのあたりの事が、木村先生の本にこう書いてあります。

「當下良知は、天賦の靈徳であるのに、自分のみが持つ先天的な能力であるかの如くにいつの間にか思い込んでいた二見子であった。當下の良知を人間化してはならない。人間化することは、天の冒瀆である。天から出たものは、天に返さねばならぬ。二見子はこのように思い返されるようになった。

ここから、〈知らず方かたの良知〉説が、こういう転落の危機の中から生まれて来たのである。當下の良知も、本来の天に返された。天一本になったのが〈知らず方かたの良知〉である。〈當下の良知〉を天に返して、自分（ひと）は〈無〉になったのである。分内ぶんないの良知として良知が自分（ひと）に分与される前の〈無〉なる自分（ひと）になったのである」（同上）

自分の心の奥にある神の分け御霊であるところの良知によって、様々な気づきを得ることが出来たものの、いつしか「自分の心の奥の良知によつて気付きを深めたのは何を隠そうこの俺だ」との思いが生じていたことに、二見直養はやつと気付いたのです。そして、人体の心の中にある良知も、人体の外にある良知、言い換えれば太虚であり、絶対者であり、神であるわけですが、同

じものなのですが、その事実が頭で分かっているだけでは、駄目だったのです。

二見直養は、人間が予感出来る人体の中にある心の奥の良知は、真の良知ではない、真の良知というものは、そんなレベルのものではない。真の良知のことを、「太虚の良知」とも言い換えています。が、「太虚の良知」は人智では理解できない、つまり人間の認識を超えた存在であるとして、人間業では知ることの出来ない良知、つまり「知らず方かたの良知」を設定したのです。

そう考えることで、二見直養は救われた、生まれ変わったのです。藤樹、淵岡山、木村難波、植木、松本両先生の境地にやつと立ち至ることが出来たのです。

良知を、「分内の良知」と「知らず方かたの良知」の二つに便宜上分けて考えることで、二見直養は、「知らず方かたの良知」を、ただ戴き祈ることが出来るようになった、「知らず方かたの良知」に対する謙虚な思いで生きることが出来るようになったというわけなのです。

當下の道德的感情をもって、良知と誤認してはならない

「分内の良知」、木村難波は「方寸ほうすん（心）の良知」といつていますが、というのは、例えば、電車に乗っていて、本を読みながら寝入ってしまった時などに、ちょうど降りる予定の駅でパツと

眼が覚めて、降りることができたという事が誰にも経験ありますよね、それは良知が働いている証ですね。ここで降りないつまりよいよ、という良知からのメッセージで目覚めたのです。

そんな経験が増えることで、良知は、人間が認識できるものだという錯覚を起こすのでしょうか。

良知を俺がの下に持つてきてはいけない、人間化してはいけないのです。良知は、体の内奥の良知も、太虚とも呼ばれる体の外の良知も同じものなのですが、良知は、万物の根源、宇宙の一切を生み出した根源なのです。それが物差しとなって、善い悪いが分かるのです。

神の存在を信じる信じないは別にして、この宇宙を、我々人間を、肉眼で見えないミクロの世界の細菌などを創造した何ものかがいるわけです。そうした存在を「太虚の良知」「知らず方の良知」としているわけです。

「太虚の良知」というものは、人間がどんなに学習しようが、修業しようが、絶対に理解することの出来ない存在なのです。そうした存在に対しては、人間は限りなく謙虚な気持ちになり、ただひたすら拝むだけになってしまうのです。

実は、「植木、松本二子の〈当下良知〉ではなく、〈知らず方の良知〉の体認こそ至極である」という二見直義の主張は、彼の独創ではなかったのです。

中江藤樹の凄さを、ここでも垣間みせられるわけですが、藤樹

は、既に「当下の道徳的感情をもって、良知、明徳の本体と誤認してはならない」（『日本陽明学派の研究』第五編江戸学派）と力説していたのです。

「分内の性（分内の良知）は、太極から分賦ぶんぷされたものであるのに、もともと分内に独立して存在していたものの如くに錯覚し、分与した本体の太極を忘れるから、いつの間にか傲ごう（おごりたかぶる）の位（境地）にすわることになる。これが困ることだ」（同上、（一）内の注は林田による）というわけなのです。

最後になりましたが、これがまたすこぶる面白いのですが、植木、松本、二見子らの説のルーツであるところの木村難波の「良知を戴き祈る」説の一端をご紹介して終わりにしたいと思います。

木村難波の教えと言いますか、考え方はこうなのです。

元々人は、天の、神の分殊ぶんしゆ、分け御霊みたま（方寸の良知）であり、神と人に対立する別々の存在ではない。人は神の表現としての人であり、人は神の作用としての人である。である以上、人が、神の位置にまで向上するために、苦行をする必要はない。人為工夫を用いて、はじめて人が神の位置にまで向上するというのは、意念（私欲）があるからだ。元々神人一体であるにもかかわらず、神から離れて「人の心が汚濁しけ穢けされている」から、神の位置にまで向上しなければならぬと考えるのは、間違ひである。

元来神人一体の自己を「戴いた祈なき」れば、もう人には「汚濁」も「穢けれ」ない。戴き祈つておれば、「自然に清める工程」が働くので

ある、と。

赤ん坊には、この身を母親に「委ねる」という思いもない。
元から母親に委ね切っているのだ

じゃ、ただ神を良知を心から尊信すればいいのか、祈っているだけで、それだけでいいのか、ということになるわけですが、実は「戴き祈る」ということは、そんなに簡単なことではありません。

木村難波は、「かいく いまし おそ戒催（戒め懼れること）」すら人為、つまり作為として認めないのです。ということは、木村難波にとつては、謙虚ということも同様で、人為、作為によつてもたらされる謙虚さなどは、本ものではない、というのです。それは、作った謙虚さであり、作り笑顔と自然にほころびる笑顔が違うように、謙虚さを演じているわけで、心からの謙虚さではないのです。

そのところを、「ゆた委ねる」を例に、次のように上手に説明してくれています。

「委ねる」ということも余分なことで、これまた「委ねる」という人為を良知の上に加えるものである。なぜなら、一例をとつて説明すれば、赤ん坊が母親の膝上に抱かれて任せきっているが、赤ん坊は、この身を母親に「委ねる」という知覚、思いさえも持たないのである。赤ん坊は、元から母親に委ねきっているのでは

り、『大学』（儒教のテキスト）に言うところの「しぜん至善（最高善という境地）に止まる」という場合も、本体良知に委ねている状態から自然に止まっているのであって、「止まる」という人為を働かせて止まるのではない、と木村難波は笑いながら言ったそうです。

とはいえ、実際に、修養も無しに、ただ祈ればいいという誤解も随分とあつたようですが、木村難波も、その門人の植木、松本も、二見直養も、一方では、学習、修業、困勉の工夫というものを強調しているのです。そこを強調した上での、信じることの大切さ、人間を超えた存在に対する畏敬の念を養うことの大切さを強調したのです。

言い方を換えれば、世間一般では、どちらかと言えば、肉体行に代表されますが、特別なことをする、つまり困勉の工夫と努力にウエイトを置いていますから、藤樹学では、もう一方の、心にウエイトを置いた工夫、良知を信じることの大切さを強調したのです。

二見直養は、「（知らず方の良知）に委ね、とうか当下を戴き尊信受用した後は、自ずからくがく軀殻（肉体）の念を超脱し、かくぜんたいこう廓然大公の（君子の）境地に至った」（同上）などと、悟りの境地に至った喜びを語っています。

既に触れましたが、淵岡山が強調しました「にうしん日新（日に新た）」ということも忘れるわけにはいきません。情性で生きるな、習慣

に流されるな、常に自分を刺激し続けろ、自己啓発を怠るなという事です。

エゴは一体感を阻む

陽明学は、私にとっての自己啓発のツールなのです。江戸期には、陽明学だけではなく、もつといろいろな自己啓発のツールがあったのですが、知性に偏り過ぎてても、感性に偏り過ぎてても駄目だ、バランスだ、中庸だ、というのが儒学や陽明学の教えなのです。

実は、日本社会もそんなんです。日本は、欧米と違って、契約社会ではなく、「礼^{れい}楽^{らく}社会」なのです。山本七平さんなども著書『論語の読み方』、この本は実によく出来た本です、の中でそう言っているのですが、日本の家庭や会社などもこの礼と楽とで成り立っていて、社則などよりも、礼と学を重んじるというのです。楽というのは、音楽、つまりハーモニー（調和）のことで、礼というのは、礼儀、つまり節度ということですね。家庭も会社も、和を重んじるだけでも、一方の節度を重んじるだけでも駄目で、和と節度の真ん中、つまり中庸がいいというのです。

礼儀や節度を重んじ過ぎれば、堅苦しい、ギクシャクとした縦社会となりますし、逆に和を重んじ過ぎれば、上司と部下の関係も、親子関係も友達感覚となり、けじめのない馴れ合い状態とな

るからです。

親や目上の人間に対する尊敬の念は、植え付けていかないと駄目なんです。シュタイナー教育も、そう説いているんです。昨今の日本は、親子の間も、節度がなさ過ぎて、友達感覚だから駄目なんです。そういう意味で、中庸というポジションを教えてくれるのも、善か悪か、右か左か、礼か楽か、どちらに自分が偏っているのかを教えてくれるのも、良知なのです。

ヴィジョン心理学の話をちよつとだけしましたが、随分類似点があることにM氏同様この私自身とても驚かされています。

ヴィジョン心理学には、

「私は自分自身をハイアー・セルフに委ねます」（大空夢湧子・訳『傷つくならば、それは「愛」ではない』（株）ヴォイス）

「自分の手を握り締めていたものを全部手放して、ハイアー・マインドにあずけてしましましょう」（同上）

「ハイアー・パワーに助けと許しを求めましょう」（同上）

「（許そう）と努力しなくても、ハイアー・パワーに委ねた時、許しの力があなたを通して流れていきます」（同上）

などといった言葉を散見できますが、今引用した言葉に、木村難波の「委ねる」についての話を思い出して頂けたかと思います。ヴィジョン心理学の創始者チャック・スベザーノは、ハイアー・セルフ、ハイアー・マインド、ハイアー・パワーは同じもので、言い換えれば、大いなる自己、聖霊、仏性のことだと語り、また、

ハイアー・セルフについて次のように述べています。

「人間の潜在意識の最も深い部分にある、答えをすべて知っているところ。この部分とつながりながら生きるとき、起こっていることは以前と変わりなくとも、人生が楽で楽しくなり、大きな流れの中に入っていくようになる」(同上)と。

つまりは、何度も言いますが、王陽明の言う「良知」のことなのです。

更には、「エゴは一体感を阻む」(同上)「痛みは優秀な教師である」(同上)などという言葉を耳にしますと、ヴィジョン心理学はまるで陽明学そのもののように思えてなりません。

ヴィジョン心理学もさることながら、最近私も入山希典氏のご紹介でお会いしたばかりですが、江戸しぐさの語り部・越川禮子さん、なんと八十余歳だそうです、のご著書『商人道』『江戸しぐさ』の知恵袋』(講談社)にも、実に多くの類似点を見つけることが出来るのです。

さて、江戸期を通じ、江戸、京都、会津の喜多方などで繁栄を究めた藤樹学が、何故その後、消えてしまって今日に伝わらなかったのでしょうか？ その理由は、幕末・維新期のドサクサの中、それどころではなかったことと、その後の薩長の富国強兵策により、欧風化が促進されたことによって途絶えてしまった、というのが真相です。

とはいえ、会津の喜多方は、蔵の町と呼ばれるほどの繁栄を遂

げましたが、その繁栄は、藤樹学、陽明学と決して無縁ではないのです。

もっとお話したい事が沢山あったのですが、この辺でおしまいとさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。